

近代中國の政治と思想

野村 浩一 著

昭和三十九年九月 筑摩書房
A5版 二五三頁 附人名索引

本書は、アヘン戦争以後、辛亥革命にいたる中國近代の思想史を、「近代政治學」の立場からあとづけ、その内面的論理の展開過程を明らかにしようとしたものである。著者野村浩一氏は、東京大學法學部卒、丸山眞男氏の門に政治思想史を學ばれた。丸山眞男氏は、かつて「日本政治思想史研究」において、徂徠學の特質を追求され、そこに聖人概念の轉回、公私の分裂、「自然」に對する「作爲」の論理を見出すことよつて、日本における儒教の自己分解と主體的自我形成の過程を明快に論理づけられた。著者も同様な問題視角から中國の近代思想史を再構成するために、この書物のもととなった三篇の論文を著わされたよつて、本書はすでに發表されたこの三篇の論文を収録して出來上つたものである。中國の近代政治思想史については、小野川秀美氏の勞作「清末政治思想研究」をのぞいて、系統的な著述はほとんどなく、また個別研究もきわめて少い。このような學界情況のなかで、著者が「近代政治學」の立場からする獨自の一貫した歴史像を構成されたこと、しかもそれがヨーロッパの政治思想との外面的類比においてでなく、その内面的論理の展開を追求するという困難な作業を通じてなされたことに對しては、心から敬意を表したいと思ふ。

たしかにこの書における論理的構築のみごときは、政治學的素養

に缺ける私たちの目を奪わせるものをもっている。しかし、そのよ
うな論理的整合性は、一面で歴史性を缺くという缺陷ともなつてい
る。つまりこの書物によつて、中國の近代史だけは論理的整合的に
説明されるかも知れないが、それが過去と未來へどう連續してい
くのか疑問であり、むしろ斷層をすら著者は肯定しているからであ
る。

著者はマックス・ウェーバーに導かれて舊中國の特質を、家産官
僚制の支配する世界帝國、恭順倫理を根幹とする持續の帝國であつ
たと考え、この舊中國が西歐の衝擊によつて音をたてて崩れていく
過程こそ、中國の近代史に他ならなかつたという。つまり、中國は
「己れを己れ自身から變化させることができなない」持續の帝國であ
つて、西歐の衝擊が舊中國の崩壞に決定的な意味をもつとされる。

このように考えるならば、中國近代史の過去と未來は一體どう連續
するのであろうか。過去はなるほど崩壞すべき舊中國として連續し
ているかも知れない。しかしそれは「新鮮な空氣に觸れた木乃伊」
(巻頭マルクスの引用)として一方的に崩壞していくばかりであ
る。そこでは西歐の衝擊をうけとめていく中國自身の内部的主體的
條件は十分に評價されない。そのいみで野村氏の中國近代史は過去
との斷絶をよぎなくされている。著者はまたあとがきのなかでつぎ
のようにいう。「中國の近代史は、いわゆる『近代化』のころみ
が強固な封建反動勢力およびそれと結びついた外國帝國主義勢力に
よつてことごとく無意味に化せられていく歴史にはかならなかつ
た。そしてまた、やがて中國共產黨に指導される勢力は、むしろこ
うした方向を見かぎり、あるいはそれと對抗することによつてはじ
めて中國史上にあらたな地平線をひらき得たのである」と。そし

て「舊中國の崩壊と新中國の建設の間には巨大な斷層のあること」を認めておられるのである。たしかにいわゆる「近代化」は失敗した。しかし、いわゆる「近代化」のころみとその失敗の歴史が中國近代史のすべてであったのだろうか。そして中華人民共和國は中國近代史との「巨大な斷層」の上に、ある日忽然とあらわれたのであろうか。著者のように中國近代史を舊中國の崩壊過程として扱えていくかぎり、歴史のなかにあり得べからざるそうした斷絶がおこってくるのはむしろ當然である。阿片戦争、太平天国、戊戌變法、義和團、辛亥革命など、必ずしもすべてが「いわゆる近代化」のころみでもなかったし、「ことごとくに無意味に化せられていった」でもなかった。これらの運動は現象的には敗北の歴史であったかも知れないが、しかしこうした運動が反帝反封建の果敢な闘争を展開したればこそ、中國は列強の完全な植民地となることをまぬがれ、インドや日本とも異った人民共和國への途を切り拓き得た。そしてその過程が半植民地半封建中國における近代に他ならなかった。したがって、中國の近代史は舊中國の崩壊過程であるとともに新中國の成立過程でもある。しかるに太平天国における「異質の倫理」、義和團における清朝の「一君萬民」原理などの理解に典型的にみられるように、中國の近代史をもっぱら「崩壊の過程」としてみる野村氏の視點からは、中國の獨立と解放を求めて立上っていく人民の武装闘争を正しく把握することができない。このことが、中國現代史への歴史的展望を不可能にした理由であり、本書の最大の難點であると思う。つきに本論にそって話をすすめよう。

第一論文は「清末における公羊學派の形成と康有爲學の歴史的意義」と題する論文である。ここでは戴震・章學誠からはじまって、

康有爲において極限に達する儒教の解體過程と康有爲學の歴史的意義が明らかにされる。すなわち、清朝教學政策によって考證學が華やかな開花をとげているときに、家産官僚制の精神的支柱をなしていた儒教は徐々に解體をはじめめる。戴震は、情—氣質の性の市民權を回復し、理の超越的規範性を奪った。また章學誠の「六經皆史」は、歴史意識と現状に對する客觀的認識を導き出した。ついで魏源は、阿片戦争という王朝の危機に直面して現實世界の透徹せる認識の上になつた政治的客觀主義を生み出した。彼は私的道德を政治から區別し、政治性の契機を超出せしめたが、そこではしかし政治的作爲の主體が缺如していた。つまり聖人概念が缺落していたのである。これに對して太平天国は、キリスト教という異質の倫理を導入することによつて、無力な臣民が全能の政治的主體となる途を志向したものであった。だがこの運動は客觀的條件の未成熟のゆゑに瓦解せざるを得なかった。つづいて洋務運動は、異質の倫理によつて眞二つに引裂かれた傳統的社會秩序を再建しようとして西洋の機器を先取した。それが結果として鬼子として變法論を生み出していったのである。康有爲はここにおいて變法の政治的主體を追求していった。彼は創法者として孔子を設定することによつて、變法の主體としての聖人—孔子を前面に浮び上らせた。かくて康有爲學は變革のそのものの儒教となる。さらに孔子教は宗教として政治から分離せしめられ、國民の義創出のための統治の手段となつた。また彼の「大同書」は、男女平等、各自獨立、天豫人權を主張することによつて、恭順原理を否定し、體制教學としての儒教の全面的な解體を招いた。かくて康有爲はアトムの個人的折出に成功したのである。譚嗣同はこの康有爲學の正統の嫡出子であつた。「仁學」は康有爲の

思想を繼承することによって徹底的な名教の否定を導きだした。また、朋友の倫を強調し、自主的結社を重視して天民を單なるユートピアとしなしたための論理的保證としたのである。梁啓超はまた民權に基礎づけられた國權を主張することによって國民を析出しようとしたが、彼については第二論文で考察される。

このように中國においては、すでに魏源などにおいて近代的政治思惟すらその萌芽をみせているが、政治的主體は尙上にのぼり得ず、恭順原理に基づく家産官僚制的國家體制のもとでは西歐的な近代化の途は全く閉ざされていた。これに決定的な一撃を與えたのがウェスタンインパクトである。かくて康有爲學は儒教のもつ思想的可能性を極限にまで凝縮したものと出現した。その一線をこえろと、儒教そのものをのりこえ、中國の近代思想が姿をあらわすというものが、その結論である。このように第一論文は、阿片戦争以後の儒教の崩壊過程のなかに近代的政治思惟の成立をさぐっていったものである。すでにのべたように、著者がその内面的論理に沈潜しつつ、中國における近代を追求していかれたその努力に對しては深甚の敬意を表するものであるが、しかし阿片戦争以後の中國の社會は、もはやヨーロッパ先進諸國におけるが如き近代ではあり得なかつた。外國資本主義の侵略は、中國の自給自足的自然經濟を破壊するとともに、自生的な資本主義の發展を阻害し、また封建勢力と結びついて地主—農民的生産關係を温存していった。すでに先進諸國における近代化—資本主義化の進行が、中國の「いわゆる近代化」を不可能にしていたからである。こうした社會のなかにヨーロッパ的な意味での近代的政治思惟を追求していくことにはどのような意味があるだろうか。もしも彼らのなかに、それに近いものが存在

していたとしたら、それはむしろ彼らの現實回避、あるいは主體缺如を意味するものではないだろうか。著者もいわれる通り、いわゆる近代化は失敗したのである。したがってそこにどれほど見事な近代的政治思惟が存在したとしても、所詮それはあだ花にすぎないのではないか。私は著者が何か中國におけるヨーロッパをさがし求めていられるような氣がしてならない。それと關連することだが、すでにエヌノミスト紙上で須田頌一氏も指摘せられている通り、この章は當然、明末清初の黃宗羲・顧炎武・王夫之から書き出さるべきであつたと思う。このことはたんに清末變法派の政治思想に與えた彼らの影響がきわめて大きかつた（たとえば黃宗羲の學校篇）という理由だけによるのではなく、彼らをその前史においてどう評價していくかが、中國の前近代と近代をどう連續させていくかという問題とかわつてくるからである。また著者は太平天國について異質の文化の外からの衝擊が、中華帝國の傳統的思想の統一體のなかに全く「異質の倫理」を生み出したという。たしかに太平天國のなかにキリスト教という「異質の倫理」があつたのは事實であるが、「異質の倫理」を闘いの武器、組織の武器とした主體が、それをうけとめ得たればこそ、傳統的な社會秩序を引裂く物質的な力となり得たし、さらにいえば、たとい「異質の倫理」がなかつたとしても、彼らは彼らの倫理を創造し、傳統的な社會秩序に眞向うから挑戦していったであらう。つまり西洋の衝擊がどれほど大きかつたとしても、西洋が中國の近代を創造したのではない。中國自體が主體的に近代を生み出していく力をどのようにもち、西洋の衝擊をどううけとめていったか、より具體的にいえば、彼ら思想家がヨーロッパ思想の影響をどう主體的にうけとめ、中國の半植民地、半封

建社會という現實をどう反映させていったかをあきらかにすることによって、中國における近代的政治思维の特質を明らかにすべきであつたと思う。

つぎに第二論文、民族革命思想の形成は、新民叢報による梁啓超と民報による汪精衛の思想を分析し、辛亥革命のもつ思想史的意義を論じたものである。梁啓超は中國の維新のためには、何よりも中國人民の維新が必要であるという認識から、専制支配に屈從する中國人民の奴性をきびしく批判し、民権に裏付けられた國民の創出と、國民國家の形成の必要を説いた。彼は當時、専制政體のもつ矛盾と異族統治による矛盾を相互連關的に正しく把握し、革命にすべての解決策を見出ししていたが、人民の未成熟と、分裂||亡國への危機感から、やがて「民約論」をすてて開明専制論にはしる。國民の創出という新民叢報の課題に對してそれが有効であると考えたからである。これに對して、汪精衛においては専制政體に對する國民主義と異族統治に對する民族主義の歴史的な結合が行われた。彼は革命と教育をとりあげ權力の奪取という事實過程と國民心理の變遷という心理過程を結合してとらえ、そこに革命の戰略論を基礎づけていった。革命は「革命の主義」と「革命の紀律」をもつことによつて自らの暴動から組織的革命となることが可能となつたのである。辛亥革命は、新民叢報と民報の二路線に對して歴史的審判を下した。しかし民報の「恢復中華」は實現したけれども、新民叢報の「群雄割據」という豫言もまた適中した。民報の路線は流動する現實に對して無力であり、有効な指針を提出し得なかつた。そこには階級の視點が缺けていたからである。したがつて民報に結集した勢力は舊中國の打倒に成功したけれども新中國建設の原理は提示し得ず、舊中

國の崩壞と新中國の建設の間には巨大な斷層が存在しているとされる。

著者は、ここで梁啓超の一九〇二・三年以後の轉換の要因をさぐつておられるが、それを時間的な繼起と政治的立場の移行においてとらえず、轉換以前と以後を一つの論理構造のなかで説明してられると思う。つまり梁啓超は専制主義と異族支配に對する十分な認識をもちながら、可能性への幻想と分裂への危機感から開明専制を主張したのだとして、梁啓超の改良主義的立場を合理化されてしまつた。これでは轉換の要因は論理的に説明されるだけで歴史的には説明されていない。やはり彼自身もいうようにこの轉向を轉向として把握し、その要因とそれが現實にもつた意味とを歴史的に説明すべきであると思う。そのためには梁啓超自身の階級的立場を明確にする必要があるだろう。

また著者は梁啓超が辛亥革命前後においてもつていた思想史的意義を従來の研究史以上に高く評價するとともに、民報の路線が辛亥革命以後の割據状態についての見通しをもち得なかつた無力をつくことによつて兩者の路線のもつ歴史的意義をいささか相對的なものにしてしまわれた感がある。やはり當時の主要な矛盾に對して彼らがどう對處しようとしたかをぬきにして同一平面で並列的に論ずることはできない。

第三論文、義和團前後の政治・思想狀況―帝國主義と中國―は、帝國主義による中國の分割||中國の分裂の構造的連關を、中國の特質的パターンとして追究しようとしたものである。ここでは、まづ義和團が清朝の側から考察される。清王朝の支配原理は、「一君萬民」「民・教(民)ハ皆赤子」であつて、天命によつて假託された

天子は、萬民の意志に民氣が清朝に叛いて自ら意志表示することを恐れた。そのため手段は徳治主義以外にない。人心を離反させることは一君萬民體制の破壊である。かくて清朝は人心をたのんで王朝體制にふさわしく外國と一戦を交える道をえらんだ。

つぎに自立軍は、戊戌變法が天下の國家化をめざしたのに對し、

萬國公法による紛争の解決、自立國の創立という異った路線を打出した。つまり國內的には天下という一つのコスモスを内部から分裂させていく路線であった。ここに、中國近代化のための不可避の通路が示されている。中國の分割という外來的運命は、それに對應せんがための中國の自己分裂という内發的事態を惹起したが、この兩者は清王朝體制という一點を核とすることによって中國の政治構造を規定したのである。自立軍當時、すでに李鴻章、張之洞ら地方督撫層が權力をにぎり、王朝權力のなかに地方的な權力核が生れていたが、革命以後は軍閥の存在が自立國の理念とは程遠い情況のもとに現實化されることになった。そしてこの時點における特徴として(1)政治權力が衰微していくにかかわらず、統治體制がタテマエとしての支配原理の強固さを保持しつづけていたこと、(2)王朝的原理を近代國家的原理によって克服する必要、すなわち中華帝國の近代化は帝國の解體によってのみ可能であったこと、(3)原理的路線の現實化の可能性として地方督撫層に注意する必要があることが指摘せられるのである。

まづ義和團と清朝についていえば、著者はここでことがらの本末を顛倒しておられると思う。つまり、義和團の擴大と、守舊派の階級的基礎である地主階級においてすら、帝國主義との間に矛盾を生じてきているという事態が清朝にそっくりいう政策をとることを迫った

のであって、清朝が自らの意志を選擇的に決定し、義和團に同調したのではない。つまり、「一君萬民」「民・教(民)ハ皆赤子」という支配原理にしたがって——それが清朝の支配原理であったかどうかは別問題として——そういう政策をとったのではなくて、彼らの常套文句であるこうしした言葉を出してあたかも彼らが主導性をもって人民の意志にしたがったかのような表現をとっているだけのことではないか。人民の意志が、義和團のような時點で、義和團のようなかたちで爆發したとき、もはや支配階級は自らの支配を貫徹し得なくなつて、人民の意志に支配されざるを得なくなつたということである。このような場合、支配階級の支配原理が何であつたかを追究することにどのような意味があるのだろうか、また野村氏のように考えるならば、清朝がやがて義和團を裏切つて八國聯合軍とともに「我が赤子」を彈壓したことをどう説明されるのだろうか、あるいはまた義和團が「扶清滅洋」から「掃清滅洋」というスローガンを打出したとき、清朝は人民の意志にしたがって退位しなければならなかつたのではないか、私には疑問に思われる。

つぎに自立軍の起義——中國の分裂についていうならば、清末地方督撫層が地方的な權力核を形成しつづつあつたのは事實であるが、それを原理的路線(王朝的原理を近代國家的原理によって克服していく)の現實化の可能性として注目されるのはどうであらうか。「自立國」という發想は、督撫層による地方割據を現實的基礎として出て來たものであらうが、それを彈壓したのもまた督撫層であつて、督撫層の地方割據を自立軍と同次元でとらえることはできない。ましてのちの軍閥を、自立國の現實化としてとらえることは、たとい「自立國の理念とはあまりにも程遠い情況のもとにおいて」とい

但し書つきであつても完全な誤りであらう。地方督撫層あるいは軍閥が、帝國主義の侵略と農民支配において果した歴史的役割をぬきにしてそれらを論ずることはできないと思ふ。

以上、近代史の専門家でもないわたしが、大變口はばつたい批判を重ねてきて恐縮であるが、いくらか思想史に近いことをやってみて私自身に對する自己批判もふくめて忌憚ない意見を述べさせていだいた。思想史をやっていると、つい思想がひとり歩きをはじめ、西洋の近代が到達した地點から、西洋近代の論理でもって過去を再構成しようとする。しかし、しばしば思うことだけれども、たとえば、公私の分裂、内面的領域の確立、近代的自我の成立というようなことも、資本主義的機械生産のもとで、人間疎外が進行し、形式的な民主主義の存在が、人々の政治的關心の領域を極限してきたヨーロッパ諸國と、半植民地、半封建的條件のもとで政治をぬきにしては個人が存在し得なかつた中國とは、近代的個人そのものの様相を異にするのは至極當然のことであらう。また、現在の中華人民共和國においては、公私の分裂ということは原理的に存在せず、公_レ私として、またかくあることが個人の全面的な開花として考えられていると思ふ。そこではヨーロッパと異つたあらたな個人が生れつつあり、ヨーロッパにおける公私の分裂はもはや克服されるべき不幸な分裂として感じられているであらう。したがつて中國の近代は、中國の現代に連續するものとして、現代はまた創造さるべき未來の究極的な價值——それはまた我々の創造しようとする未來にかかわつてくる問題であるが——に連らなるものとして把握されねばならないと思ふ。

私は今まで丸山眞男氏や野村浩一氏の論著から多くのものを學ば

せていだいた。いわゆる中國學以外の分野からするこうしたアプローチは、中國學の分野においてきわめて貴重な意義をもつていたと思ふ。こうした思想史の方法論について私なりに検討し批判する機會を與えていだいたわけだが、野村氏の「近代政治學」特有の用語と陰影に富む文章は、たえず私なりの推測をまじえて理解しなければならぬ點があつて、あるいは論旨を誤解したところもあるのではないかと恐れている。御海容を乞ふ次第である。

(小野 和子)

中國に
おける 回教の傳來とその弘通 上下二卷

田 坂 興 道 著

昭和三十九年三月 東洋文庫
A5判 一七二六頁

本書の著者田坂興道氏は、昭和十四年東京帝大を卒業、ひきつづき東方文化學院にあつて中國回教史の研究に従事され、その五ヶ年にわたる研鑽の成果は、昭和十八年、「支那に於ける回教の傳來と其の弘通」と題し、別篇「回回館譯語の研究」と共に同學院に提出された。爾來、著者並びに關係諸氏の、同書出版についての絶えざる希望と努力にもかかわらず、その出版は容易に實現を見ず、著者は不幸にも、去る昭和三十二年急逝せられた。その間、著者は右書を基にいくつかの論文を諸誌に發表されたが、同時に、総合的な中國回教史を發表する用意のある事を、論文のはしはしに表明しておられたので、我々後進は、その發表の一日も早からん事を願ひ續け